＜現地取材＞

指導と生産がガッチリ手を組んで

躍進する鹿児島県の〝えい茶〟

河　見　泰　成

特殊火灰性土壌が織りなす魅力的な薩摩半島の起伏

レモンを浮かした朝の紅茶，ブラックの珈琲。どちらも好きです。しかし砂糖を入れないと（もっとも入れない人もいますけど…。）喫（の）みにくいという点に，多少こだわりを感じます。本当云うと私は，やはり日本人なのかお茶の方を好みます。あの特有の香りと風味，そして幾分〝しぶさ〟を感じさせるあの色彩は，とても紅茶や珈琲の及ぶところではないでしょう。

物の本によると，お茶の原産地は中国，日本であるとも，また中国，日本を含めた東南アジア諸地域が主産地だとも書かれています。いずれにせよ，中国では古くから嗜好飲料とされ，日本では平安朝頃に賞用されていたようですから，お茶は相当に長い歴史を持っている訳ですね。茶が欧州に伝来したのは17世紀の頃だと云われています。

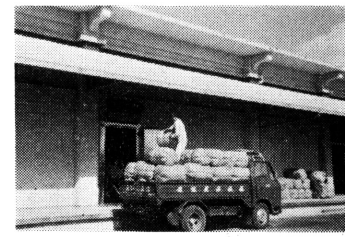
お茶と云えば，さき頃お茶の新興産地として急速に台頭してきた鹿児島県揖宿（いぶすき）郡頴娃（えい）町の現場を訪れる機会に恵まれました。これはチッソ旭肥料(株)福岡営業所の企画として何年か前から計画されていながら，陽（ひ）の目を見ずに今日に至ったものです。

連絡があったのを好機に，さっそく11月17日の午後，新幹線で西下したんですが，懸念していた通り東京を15分遅れで発車。そのままなら西鹿児島行き特急には新大阪で乗継げた筈が，遅れは35分と拡大。結局，寝台にもぐりこんだのは新姫路駅でした。

列車はひと晩中，停車する筈ではないのに…と思う駅で停ったり，ガタゴトやっていましたが，夜が明けてからの遅れは結着駅に近づくにつれてその巾が拡がって，定刻よりマル一時間も遅れてようやく解放されたのには驚きましたね。この頃のように，いつも遵法闘争やストの動向を，イヤそれどころか不測の事故突発さえ考えながら，車内にいなけりゃならないとは，全く不愉快であり馬鹿げた事ですね。

しかし，遅れたお蔭で，夜中，車窓を叩いていた雨は気圧の谷とともに遠ざかり，薩南一帯はこれまでにも見たことがないような，紺碧の空と緑。息を呑む美しさ…とは，あゝいうのでしょうか？そのかわり肌に冷たい北西の風が吹きつけていました。

西鹿児島駅頭で福岡営業所の千葉さん，中野さんに挨拶をすましたあと，さっそく中野さんの自動車でえい町まで約50km，快晴の薩摩半島を南下する。初めて目にするコラ層を主体とするという特殊火山性土壌が織りなす薩南の自然の起伏。これには不思議な魅力がありますね。また遠く近くに現われる東支那海を蹴立てゝいる豪快な波頭正に胸晴れる思いでした。そしてほどなく，えい町農協のご自慢であり，えい町のシンボルとも云うべき茶の大冷蔵庫（収納能力25万ケース）に到着しました。



えい町農協の茶冷蔵庫

戦後の混迷期も夢と過ぎて連年躍進をたどるばかり

さて，現地の皆さんにお目にかかっていろいろ伺ったことを紹介する前に，まずここ，えい町のお茶についてその概略を述べておきましょう。

記録によると，えい町で茶園の栽培が始ったのは明治の末期だと云われておりますが，ここに茶が芽生えたのは遠く天保7年（今から138年ほど前）に，新牧の釘商人が都城から茶ダネを持ち帰えり，播種したのが始まりだと云われます。

産業史的には高吉権右衛門（1866～1933）という人物がいます。高吉翁は谷場地区の人で，茶業の有利性を説くとともに，明治30年には原野5haを開こんして茶園を造成し，38年には焙炉製茶技術を自力で導入し，更に40年には茶業会議所茶伝習所を誘致して谷場に設置し，多くの製茶技術者が養生されましたが，一方，販路の拡張にも努力されたと云われております。

こうして大正，昭和の初期にかけて本格的に栽植が行われ，昭和10年には100haの茶園から13の荒茶工場で8万kgの荒茶が生産されるに至りました。

しかし今度の戦争がぼっ発して，食糧増産達成が至上命名になると，当然のことながら茶園も畑地へ転換を余儀なくされましたが，戦争終結とともにまた旧態に復しました。

戦後の特徴として注目されるのは，われわれの生活の欧風化につれて紅茶が時代の脚光をあびたことでしょう。ここ，えい町でも国や県の指導下に，昭和23年から紅茶栽培が始まり，37年には5工場で10万kgの紅茶を生産するまで至りましたがその後停滞する一方，昭和40年代に入って経済の急速な成長につれて，茶の需要動向にも変化が現われはじめ，緑茶の需要が伸び，価格も年々高騰し現在に至っている訳であります。

東支那海に沿って16km，東は海聞町・指宿市，西は知覧，北は喜入町に接するえい町は，総面積100・64m²で，東部から北部にかけては大野岳（466m）から標高200～577mの山丘が起伏し，また西部はゆるやかな起伏をなして，台地状の畑地を形成しております。土壌は先に述べたようにコラ層を主とする特殊火山灰土壌におおわれています。

えい町の川野
主任指導技師

えい町の上野
指導技師

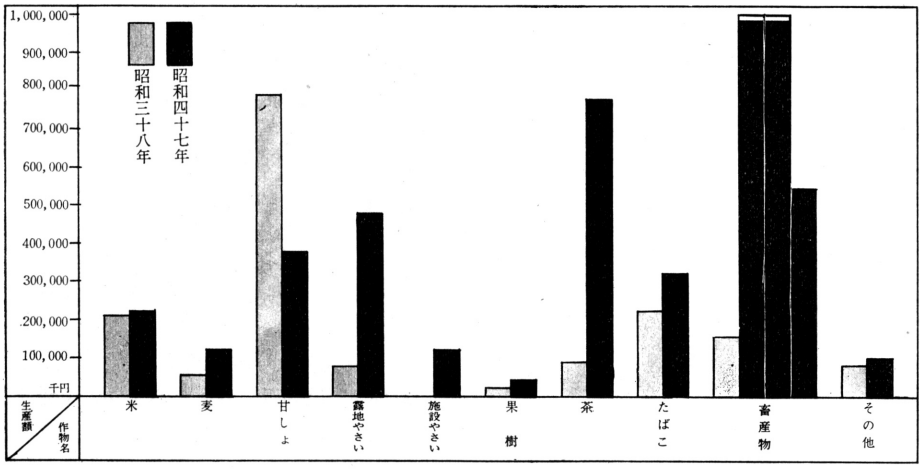
しかも西北部の山丘地帯は5月から8月にかけて霧が発生しますし，年間降雨量は2,000mm～2,500mmに達するのです。すなわち，えい町は銘茶産地としての適格性を充分に備えていることがよく判りましょう。

元来，特用作物の生産と流通が，営業資本の影響を受けている場合が少なくありません。お茶などもその例で，完全に農協一本化体制を確立するには，各産地ともなお相当の努力を要するでありましょう。

えい町農協の
加治佐常務理事

えい茶の場合も例外ではありませんが，現在なお商業資本の進出を許している面もあるようですが，これを仏拭するてだてとして，生産と流通を指導という機能で強く結びつけているのです。具体的に申しますと，“茶対策協議会”を中心にして農協と町役場と生産者が手をとり合っていることです。

えい町の農産物の動向（えい農協）



すなわち国や県の補助事業（37年新農村建設，42～44年地域特産，46～47年第二次農業構造改善事業）を主軸とする町の行政施策によって生産基盤の整備（集団茶園および茶園造成その他処理加工など）と生産技術の改善と近代化が促進され，